

## 関西大学国文学会彙報

## 二、関西大学国文学会研究発表会

### 一、令和元年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

令和元年5月23日(木) 二年次生飛鳥臨地研修

7月20日(土) 第一回国文学会研究発表会（後掲）

10月16日(水)～17日(木) 三年次生宿泊セミナー

（於飛鳥文化研究所）

11月28日(木) 院生合同学術研究大会

12月21日(土) 第二回国文学会研究発表会および、

田中登教授古稀記念特別講演会（後掲）

令和2年1月25日(土) 第一回ブレ・ステューデント・プログラム

3月14日(土) 第二回ブレ・ステューデント・プログラム

3月23日(土) 新二年次生対象専修別履修ガイダンス

（国文学会主催ポスターセッション併催）

### ◇第一回国文学会研究発表会

日 時 令和元年七月二十日(土)午後一時三十分より

会 場 文学部第一学舎 第五号館 E棟四〇二教室

研究発表

「小堀政一（遠州）作『辛酉紀行』諸本について」

本学大学院博士課程後期課程 藤原みずき

「筒井康隆「虚人たち」論―対立存在の受容をめぐって―」

本学大学院博士課程前期課程 松山 哲士

「石川淳『六道遊行』論―〈歴史〉認識をめぐって―」

本学大学院博士課程後期課程 吉田 拓也

「『虎明本狂言』と『狂言六義』における行為要求表現の対照

―脇狂言之類・女狂言之類について―」

本学大学院博士課程前期課程 八坂 尚美

「理義字と世話字」

本学大学院博士課程後期課程 山口 翔平

◇第二回国文学会研究発表会

日 時 令和元年十二月二十一日(土)午後一時三十分より

会 場 文学部第一学舎第一号館 A棟 三〇一会議室  
研究発表

「伝西行筆私家集の筆者

—「二条摂政御集」・栞形本『曾丹集』・『出羽弁集』を  
中心に—

本学大学院博士課程前期課程 阿部 彩乃

「川端康成「虹いくたび」論

—〈生〉の希求／彷徨の物語として—

本学大学院博士課程前期課程 辻 秀平

「好悪表現の対象を示すヲが用いられやすい構文条件」

本学大学院博士課程前期課程 池田 尋斗

「多義語の書き分けとその定着—動詞「さす」を例に—」

本学大学院博士課程後期課程 山口 翔平

講 演

「古筆研究の思い出」 本学教授 田中 登

三、関西国文学会研究発表会発表要旨

なお、成稿し、本号に掲載したものについては省略した。

◇第一回国文学会研究発表会（七月二十日）

研究発表

「小堀政一（遠州）作『辛酉紀行』諸本について」

藤原みずき

『辛酉紀行』は茶道流派・遠州流において、流祖である小堀政一（一五七九～一六四七）（以下、遠州と称する）が著作した紀行文であり、さらには遠州の自筆本が現存する作品として伝えられている。本発表では、定家様で書写された『辛酉紀行』諸本について、それらの本文異同を根拠として、成立過程を考察した。

現存する『辛酉紀行』諸本には、遠州の自筆本であると指摘される諸本が幾つか存在する。それらの諸本が遠州自筆本であると指摘される根拠は、定家様で書写されていた。遠州は定家様の上手と評価されており、茶道具の箱書など、定家様を用いている。また遠州の定家様は、遠州の息子たちや遠州流

代々の家元によって継承されている。遠州流において流祖である遠州の権威を象徴する書風として、強く意識されていたことがうかがえる。つまり定家様で書写されたテキストが存在する、さらには流祖の著作たる『辛酉紀行』は、遠州流にとって重要なテキストとして伝承されてきたことになる。

また『辛酉紀行』に関する研究を進めると、定家様で書写された『辛酉紀行』諸本の中でも特に注目されている伝本として、鴻池家本と益田家本がある。鴻池家本・益田家本は遠州流十二代家元である小堀宗慶氏によって、遠州自筆本であると指摘されている。小堀氏はこれら二本に確認できる本文異同から、鴻池家本と益田家本は遠州による原本と改稿本であると指摘されている。しかし鴻池家本・益田家本の二本のみで考察しても、それら二本の成立について明らかにすることはできないだろう。そこで本発表では、鴻池家本・益田家本以外の定家様で書写された諸本についても本文異同を確認し、特に鴻池家本・益田家本と異なる本文を持つ天満堂本を加えた三本について、諸本成立の過程を提示した。そして上記三本に確認できる本文異同から、定家様で書写された『辛酉紀行』伝本について、いずれもが遠州の著作した原本ではないと指摘した。これまで遠州が著作した原本と改稿本であると指摘されてきた鴻池家本と益

田家本だが、その可能性は低いと指摘する。遠州流の流派形成過程において、定家様で書写された写本を遠州自筆であると伝承した可能性を含めて指摘した。

「筒井康隆「虚人たち」論——対立存在の受容をめぐって——」

松山 哲士

（本号掲載）

「石川淳『六道遊行』論——（歴史）認識をめぐって——」

吉田 拓也

（本号掲載）

「『虎明本狂言』と『狂言六義』における行為要求表現の

対照——脇狂言之類・女狂言之類について——」 八坂 尚美

狂言は言葉こそ古いものの、内容は「コント」のような、現代にも通じる笑いを主とした劇である。発表者は江戸時代初期に成立した大蔵流の『虎明本狂言』・和泉流の『狂言六義』2つの流派の狂言台本を見比べたとき、やりとりの仕方に差が認められることに気が付いた。例えば「連歌毘沙門」という演目における同じ場面での虎明本「先神酒をくれい」と六義の「目

出たう、神酒は勧めぬか」のような例である。ただ、先行研究においては別々の流派の台本の具体的なセリフの対照研究はほぼ行われておらず、表現の差について研究の必要性があると考えた。

そこで本発表では、虎明本での分類が「脇狂言之類」「女狂言之類」となっている曲のうち、虎明本と狂言六義で共通に存在する曲の、共通の命令・依頼の場面での行為要求表現における具体的なセリフの対照を行った。そこであらわれる行為要求表現を、命令形を用いる直接的な行為要求か、それらを用いない間接的な行為要求かという観点から分類した。

調査の結果、虎明本ではどの類においても直接的行為要求が9割以上使用されており、基本的に命令形などを用いはっきりと行為要求を述べ立てる姿勢であることがわかった。虎明本では直接的な行為要求の運用方法が特に重視されていたと言える。一方の狂言六義ではそういった傾向になく、特に虎明本には見られない形式の婉曲的な行為要求が多数使用されていた。

また、そのような台本間の表現傾向の差がなぜ生じているのか、各流派の辿ってきた歴史を踏まえ考察した。大蔵流は武家による保護、客層も武家という背景から、文末の敬語を重視した直接的な表現になるのに対し、和泉流は尾張藩の保護を受け

ていたとはいえ弱小であり、観客の身分は武家から庶民にいたるまで上下にわたるとい背景から、敬語という語形以外の部分でも丁寧さを示すため婉曲的な表現が用いられるという事情を想定した。

#### 「理義字と世語字」

山口 翔平

『童子字尽安見』(1716年刊)などに「理義字集」という章があり、144項目が収められている。この「理義字」に関する研究は管見の限り見当たらず、こういった意図で、どのように集められたものか明らかではない。そこで、同時代に広く流通していた「世語字」などと比較しながら、「理義字」について明らかにしようとした。

Wikipediaには「理義字」という項目があるが、2008年(2015年までは「同じ漢字を2つ、ないし、3つ組み合わせる構成される漢字」というような説明がなされていた。しかし、これは記事編集者が「理義字集」の冒頭だけを見て誤った解説を付したものである。この意味での「理義字」はインターネットを中心に広まっているようである。

「理義字集」は管見の限り、『童子字尽安見』(1716)、『年中

往來用文章』(1787)と『門引節用万宝蔵』(1798)、『早引文字通』(1841)にしか見られず、『童子字尽安見』が「理義字集」の最初のものと思われる。構成の順序から見るに、着想には品字様を収集したものが根底にあり、そこから「雑部」に収められるような形の面白い字へと派生していったのだと考えられる。後半部の奇字は文字の収集が雑多で、画数が多いだけのものなど多種にわたることからも、後半部は派生的な部分であると思われる。

一方、世話字は近世期に盛んに行われた俗な当て字である。古屋彰によると、世話字はことばの音構成と対応しているものが85%強をしめている。これは、「理義字」の性質とは異なる。しかし、理義字と世話字には一致するものなども見られ、『童子字尽安見』の作者が何らかの形で「世話字尽」を見ていたことが窺われ、その対応性を見出すことができる。「世話字」という、音に漢字を対応させた俗的な表記法が念頭にあり、それに対応する形で「理義字」という語を創出したものではないかと考えられる。

## ◇第二回国文学会研究発表会(十二月二十一日)

### 研究発表

「伝西行筆私家集の筆者―『一条撰政御集』・枅形本『曾丹集』・『出羽弁集』を中心に―」 阿部 彩乃

『一条撰政御集』は江戸時代の極め札等では伝西行筆であるとされている、縦一三・〇センチメートル、横一二・三センチメートルの大和綴じの冊子本である。また、冷泉家時雨亭文庫蔵の枅形本『曾丹集』は平安中期の歌人曾禰好忠の家集で、縦一五・〇センチメートル、横一四・〇センチメートルの綴葉装一帖である。同じく冷泉家時雨亭文庫蔵の『出羽弁集』は寛弘元年(一〇〇四)の閏九月十一日に左大臣、藤原道長に馬十疋を献じたこともある(『御堂関白記』)出羽守平季信の娘であったゆえにその称があり、縦一四・四センチメートル、横一八・五センチメートルの大和綴じの一帖である。

先行研究では、『一条撰政御集』・枅形本『曾丹集』はそれぞれ、藤原俊成の監督の下、数名の書写者スタッフによって書写された「俊成監督書写本」であることが田中登氏、名児耶明氏によって述べられている。さらに、片桐洋一氏、田中登氏によって、これら『一条撰政御集』・枅形本『曾丹集』・『出羽弁集』の三

集の筆者が同一であるとの指摘がなされている。

しかし、筆跡のみで書写者を判断するというのは、主観に頼りがちになってしまおうという問題点がある。また、書風というものとは違う人物による筆であっても似通っていくという特徴があり、書写年次の特定をするには有効であるが、具体的な筆者の分類には適さないと考える。

そこで、本稿では、『一条摂政御集』・栞形本『曾丹集』・出羽弁集』が同筆であるという先行研究を客観的に裏付けるため、筆跡以外の三つの観点から筆者を細分化し、合計一九群に分類した。しかし、一集の書写者が十数名も存在したと考えるのは現実的ではないため、「俊成工房なる一つのサロンのような中に、複数人が集まり、置いてある同じ筆や墨を使用して書写活動を行った」という仮説を立て、出現する丁が多かった四〜五群に大別した。その際、三集すべてに共通する群や、使用した筆のみが異なると考えられる群が見られた。

また、筆者が複数人いる場合に生じる問題として、三集の行詰は不揃いで、和歌も面によって二〜三行書きとなっているが、細分化した際に、同じ分類群であっても面によって行詰や和歌の行書きが異なることが挙げられる。そこで、三集の装丁を確認し、一紙に対応する面を明らかにすることで、三集の行詰や

和歌の行書き、装丁が親本に忠実に再現されていることを明らかにする。

「川端康成「虹いくたび」論―〈生〉の希求／彷徨の物語として―」  
辻 秀平

「虹いくたび」は、『婦人生活』（同志社刊）に昭和二十五年三月から連載された川端康成の長篇小説である。本作は従来の川端研究の中で、通俗的な〈中間小説〉として位置付けられており、先行研究は僅かしかない。

川端は敗戦前後に相次いだ知己の死を経る中で、人間の生や死の意味を様々に考え、『現在の〈生者〉が過去の〈死者〉を語る』ことに対する問題意識を抱くようになる。こうした意識のもとで書かれた昭和二十年代前半の川端作品は、『死者』の存在の意味や、『生者』と『死者』との関係性を様々に模索するような傾向がある。「虹いくたび」はこうした背景の中で生まれた作品であり、『生者』と『死者』との関係性を巡る、当時の川端の問題意識が表れたものであると考えられる。

この点を検討するにあたり、登場人物（Ⅱ〈生者〉）を、過去の〈死者〉とどのように関わっているのか、という観点のもとで三つに類型化した。第一に、『死者』の存在や記憶を忌避

する水原や青木のような壮年の父親たち、第二に、〈死者〉の記憶に囚われ続ける娘の百子、そして第三に、〈死者〉の存在に囚われず幸福の中で生きる百子の異母妹・麻子や、その友人である夏二のような若者たちである。

第一および第二の類型に含まれる登場人物は、〈死者〉との間にわだかまりを有するという共通項がある。壮年の父親たちは他人の子を妊娠した百子を墮胎させ、その責任を〈死者〉に転嫁するかのような言動をとる。また百子は不幸のスパイラルに陥っていく。

それとは対照的に麻子や夏二は、〈死者〉と敢えて関わろうとはせず、「生きてゐる人のため」に生きるという、オルタナティブな〈生〉の姿を示している。こうした〈生〉の姿は百子にとつて得難いものであり、百子は麻子や夏二のような幸福な〈生〉を希求しながらも、それが得られないまま物語が終わる。〈死者〉との間にわだかまりがある〈生者〉たちは、互いに傷付け合いながら不幸へと陥っていく。それに対して、〈死者〉と敢えて関わりを持たない〈生者〉たちは、前者とは異なる次元で、幸福な〈生〉を送ることが約束されているのである。「生きてゐる人のため」に生きる〈生者〉の姿は、如上の問題意識に対する一つの回答であると考えられる。そして、こうした〈生〉

の姿が描かれたことは、以後の川端作品を考える上で重要な論点を提起しているように思われる。

「好悪表現の対象を示すヲが用いられやすい構文条件」

池田 尋斗

(本号掲載)

「多義語の書き分けとその定着―動詞「さす」を例に―」

山口 翔平

現在、多義語は意味によつて書き分けるものがあり、動詞「さす」も意味によつて漢字を使い分ける。しかし、「さす」の漢字表記のうち「差す」という表記は一見奇妙な使い方がなされている。

動詞「さす」の表記の中でも特に「差す」という表記は、「差す」の意味を顧みない運用がなされている。ふつう、和語を漢字で書きあらわすという行為は、和語と漢字の意味が一致しているから行われるものであるが、「嫌気が差す」「傘を差す」のような「差す」は和語「さす」と漢字「差」の意味に関連性が見られない。このように、和語と漢字とが対応していないことに加え、「傘を差す／指を差す／日が差す／魔が差す」など「差す」

という表記は幅広い用法で可能であり、意味の共通性を見出しにくい。こういった点、特に意味の共通性がない様々な用法に用いることができる点で他の漢字表記とは異なる。

「とす」の表記について小型国語辞典を調査すると、次の傾向が導き出された。(①「鋭い物を突き入れる」意味の場合は「刺」のみ。②「方向・事物を指示する」意味の場合は「指」優先。③「穴や隙間に入れる」場合は「挿」優先だが、「差」も可能。④その他の意味はすべて「差」で可能だが、意味によって「射」「注」「点」「鎖」なども可能。⑤慣用句的で、元の意味を見出しにくいものは「差」となりやすい。)この傾向はおおよそ納得できるが、辞書の表記に関する記述は、仮名書きを一切考慮しないもので、こういった場合に仮名書きが使いやすいかは判然としなかった。

明治、昭和初期の表記を、『言海』『大言海』、『日本語歴史コーパス (CH)』を用いて調査をしたところ、現在の表記と同様の傾向を示すものの、明治、昭和初期の「差す」ほどの意味においても現れ、広い意味で使われていた。そのことに加え、『大言海』において『言海』には現れない「発」「映」「撃」などが挙げられており、これは漢字表記が柔軟であったことの現れであると考えられた。CHでの調査結果の「刀をさす」の表記

が様々あったが、様々あるのは表記が固定化していなかったからだと思われる。

しかし、漢字施策によって使用できる漢字が制限された。ふう、漢字が制限されれば、仮名で書きあらわすしかないが、「とす」の場合いろいろな意味に広く使える「差す」が存在した。制限された表記の部分を「差す」がカバーする形でこの表記が広まったのだろうと考えられた。

#### 講演

#### 「古筆研究の思い出」

田中 登

日本は古来書の国である。遠く天平の昔から現在に至るまで、数々の優れた書の作品が生み出されてきたが、文学作品が印刷されて世に出回るようになったのは、江戸時代になってからのことで、それまでは人がせっせと手で書き写した「写本」という形でもっぱら世に流通していた。この写本で注意すべきは、平安時代の貴族たちは、ただ単にもとの本を正確に写せばよいと考えていたのではけっしてなく、一巻の書物、一冊の本の中に王朝世界の「みやび」の精神を体現すべく、とびきり美しい料紙に美しい文字で書くことに意を払っていた、ということである。そのため、美術的にみてもきわめて価値の高い写本がた

くさん作られるようになったのだが、室町時代の後半から江戸時代にかけて、茶道の隆盛とともに、古人の筆跡を鑑賞する風が起きると、そうした美しい本は、愛好家の求めに応じて、次から次へと切断されてしまった。こうしてできたのが古筆切すなわち古写本の断簡である。かつて江戸時代以前に書写され、今日までその完全な姿を伝えている本も、その数けっして少なくなはないが、実はその何十倍、いや何百倍もの本が切られ、断簡となってしまうたのである。

本講演では、過去四十年に及ぶ古筆調査の中で、出会うことができた断簡の本文研究上の意義を解説する。取り上げた切は、以下のとおり。

- 一 伝世尊寺経朝筆大四半切（無名和歌集）
- 二 伝寂蓮筆寢覚物語絵詞切
- 三 伝後光厳天皇筆小六半切（竹取物語）
- 四 伝後鳥羽天皇筆玉藻切（金葉集）
- 五 伝藤原為家筆六半切（公時集）
- 六 伝西行筆六半切（とはすがたり）

#### 四、平成三十年度卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇平成三十年度 国語国文学専修 卒業論文

##### 〔国文学〕

赤司 瑞季 三島由紀夫『肉体の学校』論

— 妙子の卒業 —

麻島 駿汰 百人一首の恣

石川 皓一 村上春樹『海辺のカフカ』論

— 作品に込められた思いを読み解く —

今橋 習子 『源氏物語』における和歌

大澤 奈美 太宰治『斜陽』論

— 登場人物の人物像を中心に —

大関 紀子 泉鏡花「化鳥」論

— 「母様」なるものとは —

太田 健裕 『今昔物語集』巻二十八にみる「笑い」

岡本 梓 『今昔物語集』「第二十六 利仁將軍若時從京敦賀

将行五位語第十七」について

勝矢 裕貴 『平家物語』「木曾最期」に描かれる義仲像

亀井 淳史 和歌に詠まれた「こころのやみ」

— その表現と題材 —

川上 幸子 『源氏物語』における「らうたし」「らうたげなり」について

川坂 晏澄 末摘花論

―変わらない本質―

菊池 美里 嫌われる男性像について

―『今昔物語集』巻第三十第一から考察する―

菊元 優奈 『今昔物語集』にみる食と欲

岸田勝太郎 蹴鞠とサツカー

―蹴鞠から見るサツカー―

北河圭太郎 山崎豊子 『暖簾』論

―大阪商人について―

木谷 和之 川端康成 「虹」論

―銀子と〈美〉を中心に―

北野 裕子 円地文子 「女坂」論

―母と息子の関係性を中心に―

越谷 朱音 福永武彦 『忘却の河』論

―家族の和解と罪の意識からの解放―

小山真理菜 三島由紀夫 「潮騒」論

―「潮騒」における幸福とは―

齋藤恵里佳 山川方夫 「親しい友人たち」論

―恐怖を描くショート・ショート文学―

佐々木彩乃 宮本輝 「綿繻」論

―変わりゆく日々を生きる―

島岡 博香 『枕草子』と『源氏物語』における「雪」

高田千香子 「物の怪」になった六条御息所・「物の怪」になら

なかつた弘徽殿の女御

高橋 葵 染殿后怪異譚再考

高見 詩菜 夕顔が三位中将の娘であつた理由

武田 奈々 太宰治 「ダス・ゲマイネ」論

田中なつみ 谷崎潤一郎 『卍』論

―物語を牽引する女性達―

田中 優菜 宮本輝 「避暑地の猫」論

―色彩の変化と主題をめぐって―

田中理香子 小川未明 「赤い蠟燭と人魚」と「赤い手袋」論

―「赤」を通して伝えたかったこと―

玉木 雄介 夢野久作 『押絵の奇蹟』論

―〈とまどい〉と〈奇蹟のメカニズム〉―

田村菜々子 「幻」巻における光源氏

辻本紀菜梨 太宰治グッド・バイの考察

―笑いとの関係性―

寺山 博一 音楽家・源博雅の生き様

―世間の音楽の見方―

中田 一葉 能『道成寺』研究

仲山 昇太 妖怪を探して

中山 莉彩 太宰治「千代女」論

―主題から導くタイトルに込められた意味―

長島 史歩 山東京伝の作風の変化

橋原圭一郎 横光利一『花花』論

―教訓性と「真実」について―

萩原 麻琴 『薄雲猫旧話』における重層的構造

―「おもしろい」を生み出す仕掛け―

花井 隆伍 梶井基次郎「ある崖上の感情」論

―窓と主題の関係をめぐって―

濱地 遼馬 豆腐小僧の特徴から考えられる江戸時代の妖怪の

特殊性

早川 悠美 源氏物語における空蟬の存在理由

―空蟬を与えたもの―

原田 朱梨 深沢七郎『みちのくの人形たち』論

―「旦那さま」と「私」の共通性―

東 かおり 十返舎一九の化物草紙

雛埜 優太 日本古代における金融活動

福島 佳恋 『義経記』に描かれる源義経

―どうして彼は多くの人に愛されたのか―

藤岡 健人 『平家物語』に描かれた発心譚

―文覚を中心に―

前田 晏歌 六条院と道長邸

―土御門邸を中心に―

益崎 成香 『源氏物語』における恋愛と結婚

―愛された女性とその生涯―

松原 史佳 『とりかへばや物語』と『有明の別れ』における

男装の姫君について

道家茉莉子 『養生訓』中の「総論」の章における朱子学性の

指摘

光岡 虹翔 テレビアニメ『おそ松さん』資料集

宮島奈都乃 谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のおんな』論

―私利私欲を掻き立てる猫―

妻鹿 一真 司馬遼太郎『燃えよ剣』論

―新選組と武士―

森川 和俊 霜多正次「沖繩島」論

―無知の闘争―

森山 彩花 伊勢うたについての考察

―歌よみとしての伊勢―

森脇 千晶 小野小町の夢の歌6首

安本 乃瑚 平安時代における髪について

山岡 春香 源氏物語「紫と明石」

—桐壺の更衣の願い—

秦 広之 村上春樹『ノルウェイの森』論

—作中に見られる共通点と相違点—

藤本 茉莉 道真の菊

### 〔国語学〕

池田 晴紀 オノマトペ「じわじわ」の意味拡張について

池田 尋斗 好悪表現「好きだ」の対象を示すラ格について

上田 秀美 無助詞化現象の地域差について

—自然談話における格助詞「ガ」を中心として—

氏本 萌花 京都中丹地方方言におけるテヤ敬語について

岡野 智彩 「ポンコツ」の意味拡張

景山 拓海 映画『ロボコップ』におけるロボコップの言葉遣いの特徴と変遷

キャラクターの言葉遣いとその人物像の関連性

川岸まりな キヤラクターの言葉遣いとその人物像の関連性

古金谷郁美 関西方言話者同士の会話における役割

佐藤 拓 同意要求の文末形式「クナイ」の発達から見る否

定疑問文末形式の類型化

末吉 勇貴 両方向性の評価の意味が見られる程度を表す形容詞の意味変遷について

杉生 沙樹 泉州地域における一段動詞のラ行五段化について

高木 咲季 品詞的観点から見る「ーみ」形の用法の変遷

田坂百奈美 接尾辞「ミ」の用法拡張の推移と現状

—社会言語学的観点から見る「新しいミ形」—

田嶋 摩祐 学校方言の広がりについて

—大阪と和歌山の使用実態から考察する—

田邊 梨紗 指示詞を由来とする対称詞における使用状況の変遷

土田修太朗 小池百合子氏の政治談話に見る発話の特徴とその効果について

寺田 光希 異体字の世代別認知度から見る現状

土井 俊輔 文末に付けられる「知らんけど」について

中瀬耕太朗 野球における評価言葉が内包する意味と役割

中田 麻理 自称詞の使用実態について

新田 竜也 野田洋次郎がつくる歌詞の表現特有性

橋出 瑞季 海外ドラマ「SHERLOCK」に見る字幕・吹き替えにおける差異について

長谷部修平 「黄」の語誌

服部 優香 「盛る」の意味拡張と使用実態

久田 千夏 接客場面における敬語使用意識と使用実態について

藤垣久仁子 別れの挨拶の使用実態

堀部 拓実 飲食店を題材としたキャッチコピー特有の表現とその効果について

水ノ江日和 関西方言における「ちやうねん」「ちやうやん」の使用実態と機能

―自己弁護表現を中心に―

湯川 誠人 『カーネーション』から見る大阪方言の行為指示表現

楊 舒然 依頼表現の日中対照研究について

大西 恵里 大阪におけるあいづちの傾向と特徴

―話者の役割関係と話題のタイプ―

兼高 希 若年層における「大丈夫」の使用実態とその性質

◇二〇一八年九月期 修士(文学) 取得論文

### 〈国文学〉

劉 恋 野上弥生子「迷路」論

―作者の中国認識をめぐって―

叶 支亜 『万葉集』における月の諸相の研究

―『藝文類聚』との比較を中心に―

卓 安 高橋和巳「墜落」からみる一知識人の悲劇

―青木隆造を中心に―

黎 小雨 奈良時代及び嵯峨天皇時代の日本漢詩と中国の漢詩文

―唐太宗周辺の詩作を中心に―

### 〈国語学〉

山口 龍輝 語義の変化と社会

―芸能とメディアの変遷における「いちやづけ」を中心に―

◇二〇一九年三月期 修士(文学) 取得論文

### 〈国文学〉

板野 楓 遠藤周作「砂の城」論

―リルケ「ドゥイノの悲歌」との関わりを中心に―

大西 春香 国宝『信貴山縁起絵巻』第一巻「山崎長者巻」再考

金田 紘平 京伝読本における様式について

―一代記を中心に―

周 文静 武田泰淳「女帝遺書」にみられる呂太后の人間像

深川 愛 椎名麟三『邂逅』論

―矛盾の同時性について―

藤原みずき 小堀政一（遠州）作『辛酉紀行』現存諸本に関する研究

古川 真暉 『重櫛浮世清談』の研究

松室 重哉 「本院侍従集」の基礎的問題点

三代地春奈 源氏物語における紫の上の苦悩の表現

―若菜上下巻の心内語を中心に―

村上 実奈 『宇治拾遺物語』における〈連想の糸〉論再考

吉田 開 高師直像の変化について

―『太平記』八幡炎上を要因とする考察―

吉田 拓也 石川淳『六道遊行』論

―〈歴史〉認識をめぐって―

#### 〈国語学〉

中川 寛之 愛媛県宇和島市の方言文末詞

―「テヤ」の用法変化を中心に―

山崎 直哉 形容詞「ない」の否認用法の使用実態

―「ないわ」を中心に―

◇二〇一八年九月期 博士（文学）取得論文

#### 〈国文学〉

蘇 洋 井上靖中国関係小説研究

―「楼蘭」、「明妃曲」、「宦者中行説」、「楊貴妃伝」、「孔子」をめぐって―

#### 〈国語学〉

陳 韻 『古事記』における漢文助辞の用法

―同訓異字を中心に―

◇二〇一九年三月期 博士（文学）取得論文

#### 〈国文学〉

胡 文海 芭蕉発句表現論

―中国四言詩形による発句美的情緒の再現―

中村 真理 俳諧における題材と表現

―「季」の意識と「本意」の展開をめぐって―

#### 〈国語学〉

山際 彰 時を表す語彙の体系的な研究